



# 当別 TOBETSU 140 年の歴史

## 蘇る その3

開拓 60 年から 140 年  
(昭和初期～現代)

ついに戦争突入。  
農家の働き手も次々と戦場に。



出征の様子

### ■ 2,100 人が出征

昭和 16 年 (1941)、日本はついに太平洋戦争に突入、「ほしがりません勝つまでは」の合言葉のように耐乏生活を強いられるようになりました。働ける男子には召集令状が届き、当別村からは 2,100 人が出征し 271 人が帰らぬ人となりました。また、国民徴用令により年老いた人までも工場や炭鉱での奉仕作業に駆り出され、村内には荒れた田畑が目立ってきます。化学肥料も、火薬の原料となり、魚肥や豆かすも手に入らなくなったため、農作物の収穫は激減したのです。

やがて昭和 20 年の終戦を迎え、新しい時代を迎えます。食料不足は深刻でしたが、村人たちは自宅の庭の隅や鉄道用地、道路、河川敷にいたるまで畑を作り、自活用の食糧確保に努めました。生活必需品は極端に少なく、昭和 21 年にはインフレで物価は一気に 7 倍まで膨れたといえます。

### ■ 当別町の誕生と戦後の復興

戦後、戦災者や外地からの引揚者が入村し、村の人口は一気に増えていきます。村では奥地の開発を進め、新しい食料基地づくりを目指します。戦時中に取り

り払われていた当別以北の札沼線レールも沿線住民の強い要望によって、昭和 21 年 12 月から当別～浦臼の営業が再開され、人々の往来や物流が復興していきます。同年 8 月、村会の議決を経て、北海道長官に町制施行の申請を行っています。当時の戸数は 2,588 戸、人口は 1 万 5,209 人でした。

そして翌昭和 22 年 7 月 1 日、村から当別町に昇格しました。開拓の先人達がこの地を永住の地と決めてから 77 年目のことです。

戦後の民主化で学校教育は一変しました。それまでの国民学校は小学校と改称、中学校が義務教育となり、昭和 22 年 5 月 1 日に全国一斉に開校となりますが、教科書、教室、教員不足のため予定通り開校できたのは当別、弁華別の 2 校だけでした。

昭和 24 年 (1949)、当別高校が道立江別高等学校の定時制当別分校として開校、独立校舎もなかったために当別小学校の 1 教室で授業を行いました。その後、道立札幌西高等学校当別分校に変更、34 年に現在の場所に校舎が新築され、36 年には定時制併設の全日制高校 (町立) となり、39 年に道立当別高等学校となりました。

# 田園と学園を持つ 新しい都市近郊のまちへ。

## ■農協の誕生

終戦を機に農業を取り巻く環境も一変し、農村民主化の一環として当別町農協、西当別農協の2組合が昭和23年に設立されました。

昭和38年に青山ダムが建設され、水田用水の確保が容易になり、篠津原野開発事業が本格化して未



昭和25年当別駅前落成の中央配給所  
(購買店舗と会議室)

開地も水田化が進み、札幌圏の穀倉地帯として昭和43年(1968)には耕地面積の90%、6,500haに達しています。

## ■開基100年とその後の発展

昭和45年、当別町は開基100年を迎えました。記念式典は7,000名が参加、記念講演会、当別音頭の踊り、花火大会で祝ったほか、役場庁舎・消防庁舎の改築、当別町開拓郷土館・当別町青少年会館が次々と建設されました。

昭和50年10月には金沢に東日本学園大学(現北海道医療大学)が開学し薬学部、歯学部と、さらに付属病院も開院し、札幌に隣接した学園都市として新たな魅力を加えることになりました。

都市計画事業が進められ、昭和60年から下水道事業が始まるなど、近代都市としての社会資本整備が進んだのもこの頃です。



完成まじかの札幌大橋(S62)

## 参考文献

当別町史(1972年)

新とうべつ物語「写真でつづる120年」(1991年)

当別町農協史(1970年)

本町の開拓の節目を迎える今年、広報では特集を組んで、過去の歴史や市街地や地域の今昔、人々の生活などをお伝えしています。

青山など地域別に情報を集めています。当別町の歴史に関する古い写真やエピソードをお持ちの方は是非ご連絡下さい。

■情報課広報広聴係 ☎23-3069

昭和30年代の手植えによる田植風景



当別町開基100年での当別音頭(S45)



「道民の森」は昭和60年の「国際森林年」を記念する事業として当別町に誘致が決定し、道有林1万1,000haの森を活用したレクリエーション施設が完成。また、高岡の丘陵地には気候風土が似ている北欧スウェーデン王国との交流拠点、「スウェーデン交流センター」がオープンし、スウェーデンヒルズの造成も始まります。これを契機としてレクサンド市との姉妹都市提携を行い、国際交流の町として知られるようになります。昭和63年には念願の札幌大橋が完成し、太美地区を中心に住宅団地の造成が進み、平成8年には人口2万人を突破しました。

# 当別町 140 年特別企画

## 第3話 太美市街の今昔物語



### ① 太美のまちはいつできたか？

下の写真は「当別太のあゆみ」に収録されている大正末から昭和初期頃の図です。明治26年の殖民区画設定に基づき、16線、19線、基線、南3号の道路及び排水が開削されますが、現在のスウェーデン大通(17線)は道路としてほとんど使用されておらず、

獅子内山までの間は民家が1軒しかなかったといえます。

太美の町並みは駅の開設(昭和9年)からで、住民のほか、石狩、厚田方面の人々は、札幌の中心まで鉄道1本で直結する太美に往来するようになりました。この中には魚や反物、薬売りなどの行商人も多く、列車は1日2往復あり、駅前に待合所を兼ねた1軒の旅

館が登場します。

秋吉スワさんは秋吉旅館を営み、太美定住の第1号とも言われています。物流が始まったことにより、貨物を取り扱う太美運送社が設立され、10名の国鉄職員、当別太にあった駐在所や美登江郵便局が駅前に移転し、無人だった駅前は活気を帯びた市街地へと変貌していきます。

札沼線開通以前の当別太地区 (大正末から昭和10年頃)



### ③ 港もあった当別太

明治14年(1881)月形村に樺戸集治監(現月形刑務所)が開庁後、石狩、月形間の船の運航が盛んになりました。当時、蒸気機関で動く外輪船「上川丸(62t、速力8ノット、収容人数60名、昭和10年まで活躍)」「空知丸」などが運行され、その船着場が16線先の旧石狩川縁にありました。石狩川汽船会社が隔日で荷物の運送や、旅客も運び、亜麻会社も自家用船を運行す



石狩川船着場での上川丸

るなど水運が発達しました。しかし、江別の石狩大橋の架設(大正9年)や札沼線の開通など交通手段にも変化が生じ、石狩川の水運は消えていきます。

#### 参考文献

太美町発祥50周年記念誌(1985年)  
当別太のあゆみ(1982年)

#### ■ 情報課広報広聴係

☎ 23 - 3069



## 太美の風物詩は煙突？

「鉄は国家なり！」鉄を製造するための材料  
コークスの工場が太美にあった



石田コークス工場(昭和15~29年)

深夜、煙突から出る粉火は花火のようであった。  
夏の作業は過酷で、工場には風呂も備えていた。  
(現在の太美銘泉付近から南2号踏切方面を撮影)

戦時中、大量の鉄を製造するために、鉄鉱石、石炭、コークスは重要な戦略物資でした。石狩太美駅と南2号線に囲まれた駅裏の三角地に昭和15年、石田コークス工場が設立されました。コークスは、原料の粉炭が上砂川方面から貨車で運ばれ、駅裏に山

積みされ、工場専用のトロッコで窯まで運び、熱せられた窯の中で一晩ムシ焼きにされて完成します。

製品となったコークスは川崎製鉄所へ貨車で運ばれました。従業員は多い時には50名ほど雇用していましたが、戦後、外国から良質な石炭が輸入されると昭和29年、工場は閉鎖されました。工場の大きな総レンガ造りの煙突は昭和50年頃まで残されており、太美のシンボルでもありました。

### インタビュー

左から 山崎与一さん  
宮本忠義さん  
島田春雄さん



**山崎さん** 「戦後、太美駅で働いていました。駅西側の元セブンイレブンのところに国鉄官舎が17戸あり、ここにはコークス工場の粉炭が降ってきていつもざらざらしてましたよ。」

**島田さん** 「その頃は駅前通(17線)はぬかるみが多く、ひっくり返っている馬車をよく見かけました。駐在

所へ行くにも板を渡してその上を歩きました。」

**宮本さん** 「17線は湿地で農業にも適していなく、5人の地主がその空いていた土地に駅を誘致したと聞いています。駅ができてからは、

地域の有志が馬橋組合ばそりを設立し、特に冬は馬橋を使った輸送が盛んに行われていました。厚田の浜などで上がったニシンが多かったように思います。」

**山崎さん** 「戦後17線の南1号沿いに、骨粉工場があり、ニカワ(接着剤)を生産していました。その煙突が太美で一番大きかった。戦後の一時期は製油工場、澱粉工場、製縄工場などの工場が建ち、起業家もたくさん集まって太美の街が発展してきたんです。」